

3. 社会貢献活動の事例 — 功労者表彰受賞者の活動事例から抜粋 —

3. 1 代表的な活動事例

ここでは、平成 23 年度に顕彰した活動事例のうち、代表的なものとして「建設業社会貢献活動推進月間中央行事」で事例発表された次の 2 事例を紹介します。

事例No.	都道府県	協会・支部・企業名等	活動内容
B2-01	北海道	宮坂建設工業(株)	地域住民参加型防災訓練の実施
B4-01	富山県	東城建設(株)他3社	自然をつなぐ「学校ビオトープ」づくり

(1) 地域住民参加型防災訓練の実施（宮坂建設工業(株)）

事例 B2-01：北海道

地域住民参加型防災訓練の実施（宮坂建設工業(株)）

宮坂建設工業(株)が本社を置く帯広市は、広大な十勝平野の中央部に位置し、機械化された大規模農業により、国内有数の農作物生産地となっている。また、冷涼少雨で日照時間が長い大陸性気候を活かして、「十勝川西長いも」「大正メイクイン」など、食のブランド化の取組みも進められている。

一方、十勝地方は自然災害の多発地域でもある。数十年周期といわれる十勝沖地震による災害、数年おきに発生する台風など大雨による土砂崩れや道路損壊、また、十勝岳、雌阿寒岳などの火山噴火による被害、大雪による雪害など、災害の種類も多岐にわたっている。

■地域防災の取組み

自然災害の多い十勝地方を事業基盤とする同社は、台風等の異常気象時や、地震災害発生時には、速やかに対策本部を設置して、協力会社を含め 24 時間いつでも出動できる体制を整えている。また、平成 5 年より毎年防災訓練を実施しており、釧路沖地震や台風、大雪の際には、各地で迅速な復旧活動を行うことができた。

しかし、平成 15 年に発生した十勝沖地震 (M8.0) では、約 38 万世帯が停電や断水の被害を受け、交通網も各地で寸断されて、復旧までに数ヶ月かかるなど、道東地方の広範囲に被害が拡大した。同社は、この地震への対応を通じて、近年の大規模災害時に地域の安全を確保するためには、自治体や企業の取組みに加えて、住民一人ひとりの日頃からの高い防災意識が欠かせないことを痛感した。そ



十勝沖地震の被害を伝える記事

こで、従来から行っていた防災訓練の内容を大幅に見直し、この年から地域住民と一体となった「地域住民参加型」の訓練を取り入れることにした。

平成 22 年度の防災訓練は、9 月 3 日、帯広、札幌、北見の 3 カ所で同時開催した。訓練は朝と昼の二部構成で、第一部は同社単独の初期対応訓練、第二部が地域住民参加型訓練である。

■初期対応訓練

第一部は、震度 5 強の地震発生を想定した初期対応の訓練である。まず本社に災害対策本部を立ち上げ、テレビ会議で札幌支店、北見ヶ丘トンネル工事現場と連携を図り、河川点検、建物点検、現場点検パトロールを実施した。

同社の「災害対応マニュアル」では、震度 5 弱以上の地震発生時には、自治体等からの出動要請の有無にかかわらず、速やかに現地パトロールを実施して 30 分ごとに報告することを定めている。そのため、各パトロール班の班長は、

常に無線機・点検備品を車に搭載しており、速やかに出動できる態勢となっている。災害発生直後は携帯電話等の通信手段は通じ難いため、対策本部とパトロール班との連絡には、十勝全域をカバーできる業務用無線を使用している。また、被災による停電を想定して、対策本部となる本社には非常用電源設備を常設している。



防災訓練（帯広）の案内



災害対策本部の設置



河川点検パトロール

■地域住民参加型防災訓練

第二部は、地域住民参加型の訓練である。メイン会場となった帯広市中央公園には、地元町内会をはじめ、小学生、高校生を含む地域住民約 1,200 人が集まった。その中で、帯広警察署、帯広市消防本部、日立建機(株)の協力のもと水防訓練、重機作業の実演を行うとともに、地域住民による被災体験、防災活動体験などが繰り広げられた。



帯広市中央公園の防災訓練会場

水防訓練では、広域被災による交通規制を想定して、帯広警察署のパトカーの先導で緊急物資を搬入し、堤防決壊時の応急処置として広く用いられる月の輪工法・土納荒締切工法の実演施工を行った。こうした訓練を通じて日頃から関係部署と連携を図っていたことが、翌年3月の東日本大震災での支援物資の速やかな輸送につながるようになった。

重機の展示・実演コーナーでは、無線操縦の油圧ショベル、キャリアダンプの模擬運転や、日立建機(株)とNEDO(新エネルギー産業技術総合開発機構)が共同開発した2本のアームを持つ双腕作業機の実演展示を行った。普段は目にすることのない特殊な機械であり、市民の関心も高かった。

参加した小学生・高校生たちには、昔ながらのバケツリレーによる消火訓練や、実用的なロープ縛り、土納作成、AEDでの応急処置など、課外授業の一環として楽しみながら学習してもらった。特殊機械のシミュレーションコーナーでは、笑顔と歓声に包まれながら、ゲーム感覚で機械を操作していた。

火災発生時の煙体験コーナーでは、延長約7mのテント内を煙状の特殊な水蒸気で充満し、ビル火災からの避難の疑似体験を行った。



水防訓練（月の輪工法）



双腕作業機の実演



バケツリレーによる消火訓練



ロープ縛り訓練



三角巾による応急処置訓練

起震車での地震体験コーナーでは、過去に発生した関東大震災、十勝沖地震、新潟中越地震、南西沖地震、阪神淡路大震災等の大地震の揺れを体験できるほか、将来起こるであろう東海地震を想定した震度7の揺れも体験できた。



火災発生時の煙体験



起震車での地震体験

同社社員による炊き出し訓練では、出来上がったカレーライス・豚汁などを参加者に試食していただき、配膳・片付け方法などの課題を抽出した。

この他にも、遠隔操作で空中からの映像をリアルタイムに確認できる空中撮影システム「スカイキャッチャー」の実演や、防災パネルの展示、防災グッズの実演など盛りだくさんの内容であった。

一方、札幌会場では、発注者、協力業者、地域住民を交えて、千歳川にて油流出防止オイルフェンス設置訓練、堤防亀裂箇所へのシート養生訓練等を行い、北見会場（北見ヶ丘トンネル工事現場）では、北見警察署と合同で、土砂崩壊による生き埋めを想定した救助訓練を実施した。

同社は、この地域住民参加型防災訓練を毎年継続して行うことで、地域住民の防災意識の更なる向上に貢献していきたいと考えている。



炊き出し訓練後の試食



シート養生訓練（札幌会場）



トンネル内での救助訓練（北見会場）

(2) 自然をつなぐ「学校ビオトープ」づくり (東城建設(株)他3社)

事例 B4-01 : 富山県

自然をつなぐ「学校ビオトープ」づくり (東城建設(株)他3社)

富山県は、標高 3,000m級の立山連峰から水深 1,000mの富山湾まで、約 4,000mの高度差があり、立山のライチョウ、富山湾のホタルイカ、シロエビ、ブリ、ベニズワイガニなど貴重な生き物の生息場所として、世界に誇れる自然環境にある。

しかし近年、人の生活をより豊かで安全とするための様々な活動(治水事業、利水事業、発電事業、圃場整備事業など)によって貴重な自然環境が急速に失われつつあることも事実である。そこで、平成 12 年、こうした活動を生業としている県下の企業や団体の有志が集まり、人と自然との共生を目指して「富山県ビオトープ(biotope =生物の生息場所)研究会」を発足させた。研究会の会員数は現在約 30 で、建設業、造園業、漁協、農協、電力会社など様々な業種が参加している。

東城建設(株)、大高建設(株)、(株)岡部、(株)関口組の 4 社は、「富山県ビオトープ研究会」の第一部会メンバーとして、主に富山県の東部においてビオトープの保全、復元、創出、維持管理等の活動を行っている。

第一部会では、毎月の勉強会をはじめ、他県の先進事例の見学会や研究報告会を開催しているが、平成 14 年からは富山県内の「学校ビオトープ」づくりに積極的に取り組むようになった。

「学校ビオトープ」づくりは、学校の敷地内またはその周辺にビオトープを復元し、姿を消しつつあるメダカ、フナ、ゲンゴロウ、ホタル、キキョウ、オミナエシ等の動植物の生息環境を取り戻す活動である。これまでに富山市立月岡小学校、富山市立山室中部小学校、黒部市立三日市小学校、黒部市立宇奈月小学校の 4 校でビオトープづくりを手掛けてきた。



「富山県ビオトープ研究会」案内



三日市小学校のビオトープ



宇奈月小学校のビオトープ

■学校ビオトープのねらい

学校ビオトープのねらいは三つある。

第一は、子どもたちの身近な自然体験の場所としての機能。メダカが群れをなして泳ぐ姿を見たり、カエルが鳴く声を聴いたり、草の匂いを嗅いだり、食べられる野草を調べて調理して食べたりすることで、子どもたちの五感を刺激し、思考力や行動力、豊かな感性を育てることができる。

第二は、富山県の自然を繋ぐ場所としての機能。学校は、通常半径1～3kmの範囲ごとに設けられている。トンボやホタルの飛翔距離は1km程度という研究報告もあり、学校の敷地に、水辺、ヨシ原、雑木林等を復元すれば、現在、周辺にかろうじて生き残っている生物たちの生息場所として十分に機能すると考えられる。また、学校ならば、荒らされたり農薬を散布される等の人為的な被害も少ないだろう。

第三は、子どもたちと地域の人々とのコミュニケーションの場所としての機能。学校ビオトープづくりをきっかけに、子どもたちの父兄、先生、地域住民、地元の学識経験者、さらには行政や企業などの幅広い協力関係も生まれてくる。失われつつある地域コミュニティの復活も期待できる。みんなで話し合っただけで協力してつくった学校ビオトープは、まさに地域の財産となるだろう。

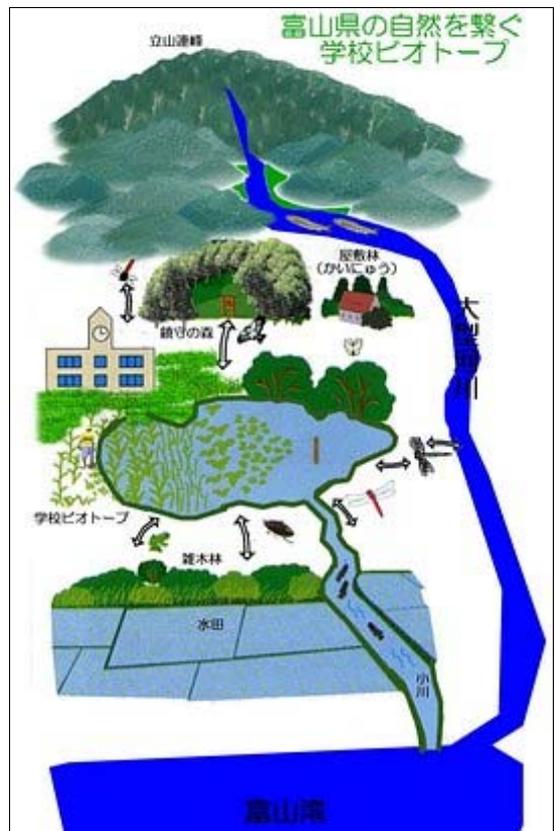
■学校ビオトープをつくる

学校ビオトープづくりで心掛けていることは、常に子どもたちが主役となって取り組むことである。

子どもたちにどんなビオトープにしたいかをイメージしてもらい、スケッチなどで具体的に描いて、簡単なコメントを書き込んでもらう。また、子どもたちが



身近な自然体験の場所



富山県の自然を繋ぐ場所



地域の人々とのコミュニケーションの場所

できる作業は、可能な限り子どもたちにしてもらおうことにしている。自分たちで描いたイメージを自分たちで形にできる喜びを感じ、ビオトープに対する愛着を深める大きな効果がある。

研究会としては、子どもたちができない部分を手伝いながら、専門家としてアドバイスし、指導していくというスタンスで取り組んでいる。



スコップで掘削（月岡小学校）



ビオトープのイメージスケッチ



バケツリレーによる土運び（月岡小学校）



ビオトープ完成（月岡小学校）

■学校ビオトープを維持する

学校ビオトープは、つくるだけでなく適切に維持管理していくことが大切である。

研究会では、復元した小川、ため池、ヨシ原に沿って風の通り道を確保するために、草を刈ったり、池の底にたまったヘドロをすくったり、繁茂し過ぎた水草を間引くなどの作業を子どもたちや先生に教えている。



ビオトープの草刈り指導

生き物たちが暮らしやすく、見た目にも美しい状態を保つことが管理の基本であり、昔の人々は、日常生活でそうした管理を行っていた。現在、無理なく日常管理を行うことができる場所として、学校は最適といえる。

しかし、学校の先生や生徒たちの顔ぶれは毎年のように変わる。熱心な先生が抜けたことでビオトープが放置され、荒れ果ててしまうことも考えられる。

研究会では、こうした事態を防ぐために、毎年学校を訪れて、ビオトープの意味やその管理方法などについて講義を行っている。

学校ビオトープの維持に対する子どもたちや先生方の不安や負担を軽減し、意識を高めるために、丁寧なアフターケアが非常に重要となってくる。

■学校ビオトープを観察する

学校ビオトープの醍醐味は、やはり生き物たちを観察することである。様々な工夫を凝らしてつくったステージに毎年、四季折々の生き物たちがやってくる。メダカ、ギンブナ、トノサマガエル、コクワガタなどをはじめ、今では希少種となったミヤマアカネなど、小さなビオトープでも、50種類以上の動植物を観察できるようになった。



水路への川石補充作業



ビオトープでの自然観察



メダカの群れ



希少種となったミヤマアカネ

富山県ビオトープ研究会第一部会は、富山県の豊かな自然を護ることは富山県民の責務であると考えており、そのための環境保全活動として「学校ビオトープ」づくりは最前線に位置するものと自負している。そして、この取組みを毎年積み重ねていくことで、将来的には全ての学校ビオトープが繋がって、富山県全体の豊かな自然を支えていくことを願っている。